

第6回 サバティカルがクリティカル



サバティカルは、
欧米の大学発の研究のための長期休暇制度で、
日本の大学では主に人文・社会科学系学部が設置しています。

医学部でサバティカル制度を設ける大学が日本にあるのかは知りませんが、
少なくとも私はその恩恵に浴しました。

夫はこの制度を利用して、都合3回海外留学をしました。

コラムの第3回でふれた米国東海岸への留学はその第1回目にあたります。
今回は夫の2回目のサバティカルに同行した子供たちが、
未来の夢を見つけたというお話です。

彼が2回目のサバティカルで選んだのは米国西海岸の大学です。

時は2,000年。
アメリカは復調していました。
家賃もべらぼうに上がってきました。
お供は子供2人。
一人は工学部の大学生、もう一人は高校生です。

この高校生、教室で授業が始まると机にひれ伏して眠りこけ、
放課後のチャイムが鳴るやクラブの部室に飛び込むという、つわものです。
娘（長女）ですが。

クラブの対抗試合には休日返上でレンルンと出かけ、
文化祭でのクラス対抗のダブルダッチでは
みんなを率いてはしゃぎまわるという筋金入りの遊び人です。

高校の成績は……、「それなりに」でした。

夫の2回目の留学が決まってから、
高校の担任の先生に呼びつけられて、
父親同伴で行った時のことです。

娘が尋ねました。

「米国の高校に1年間留学します。
向こうで単位を取って帰国したら、この高校で進級できますか？」と。

先生答えて曰く、

「あなたの成績では無理です！行くのなら休学して行って下さい。
万が一単位を取って帰ってきたとしても、ここでは1年留年です！」。

娘答えて「まあ、ええッか！」。

ということで、米国西海岸の珍道中が始まりました。

この勉強とは無縁の長女が、
アメリカの高校生活で「完全変態」しました。

ちなみに、彼女は遊び人だけでなく
「虫愛する姫君（？）」でもあります。

10年ほど前の米国東海岸のnursery schoolでの
ノビノビとした生活（コラム第3回参照）を思い出したのか、
米国到着後、速攻、英語での生活に戻りました。

米国の高校には、日本の学校で苦痛だった同調圧力が全くなく、
自分の考えを自由に言え、
言った意見に対してはちゃんと回答や評価が得られるということで、
「水を得た魚」状態になりました。

それがスイッチを入れたのでしょう。
人が変わったように、
目の色を変えて猛然と勉強をし始めたのです。

半年も過ぎると、高校の先生たちから高い評価を得て、
「これなら近くの某有名大学にも行けるよ」、
と太鼓判を押されたようです。



こうして、とうとう彼女は自分の目標を見つけました。
帰国後も、その夢に向かってキラキラとした高校生活を過ごしました。
今、その娘は、夫と3人の子供を引き連れて、
米国東海岸の大学でポスドクとしての研究修行5年目に突入しております。

もう一人は大学を休学してお供をした次男です。

米国では料理を担当しました。
父親と違って次男の作る料理は絶品です。
料理好きが高じて、料理人になるか研究者になるか、
マジに悩んだ時期があったそうです。

このころには研究者への道を決めていたのでしょう。
研究者に必須で、米国でしか体得できないのは何かを考えて、
父親の留学先の大学でWriting コースを学びの場として選びました。
ここで、聞いたことも見たこともない数々の英単語を知り、
エッセーや論文の書き方などをみっちり習ったようです。
帰国後、大学院生、ついで研究者になってから、
この経験が数々の論文誕生の支えとなりました。

作戦大成功！

西海岸で得たものはもう一つあります。
飼い主が手放したペットを保護する施設で、
古新聞をかぶって怯えていた1歳の大きな猫です。

普通、猫の引き取り希望者には飼い主に必要な様々な条件が告げられ、
条件をクリアした希望者だけが猫をゲットできます。
ですが、（これまで引き取り手が無かった）この猫は即決でもらいました。

家に連れて帰るとモリモリご飯を食べて、
とうとう12kgにまで育ちました。

日本に連れて帰るのに必要な健康診断を受けた際に、
獣医さんから「肥満で心臓が悪く余命いくばくもないよ」と脅されました。
でも、獣医さんのご託宣に反して、帰国後長女一家に引き取られたあとは、
優秀な子守として幸せに、穏やかに、「猫生」を全うしました。

めでたし、めでたし。

でも、私は末の娘と二人で淋しい一年を送りました、とさ。

